

【概要】

グルノーブル大学での日本語講師受け入れの事例ー 文化的・認知的な違いから互いに学ぶこと

グルノーブル・アルプ大学 東伴子

フランスのグルノーブル・アルプ大学では日本語教育インターン受け入れという制度はない。しかし、これまで日本の大学の日本語教育研究科の修士課程の院生・卒業生を外国語講師（レクター）というポストに何人も受け入れてきた。これは1年という期限付き（1回更新可）の正規の教員ポストで、公募により採用され日本語教師として着任するものであり、教育研修に来るインターンとは性格が異なる。しかし、このシステムは、大学院で日本語・日本語教育を学び、短期実習を経た若手たちが海外の教育機関で「武者修行」を行うのに適しており、講師本人、受け入れ側、そして日本語科の学生の三者にとって得るものが多いと考える。そのため、日本語科の外国語講師（レクター）のポストの一部はこのような院生・卒業生で占められてきた。本発表では、グルノーブル大学の日本語教育と外国語講師受け入れの状況を説明したのち、講師の人たちの協力による内省アンケートの結果を一部紹介し、どのような学びがあったか、また現地の専任教師、学生は何を得ることができののかを考える。

グルノーブル大学の日本語コースは1986年に開設されて以来発展を続けてきたが、2004年に外国語応用課程(LEA)の日本語の初心者のための準備学年が開設された。（以降、中等教育で広く第一・第二外国語言語として教えられているヨーロッパ言語と同じように大学1年生は既習者が対象となった。）この時期から講師のポスト数も増え現在までに総計26名を受け入れている。前述の日本語研究科修士課程在籍者・出身者だけでなく、その他の経歴の人も多いが、フランスの高等機関での正式な教授経験がなく、日本語教育へのモチベーションが高いという共通点を持つ。

7人を対象に行った内省アンケートの一例を挙げると、当校では、担当科目の目的や内容にもとづき、各教師に自由に授業を構築してもらう方針をとっているが、その自由さが着任当時の難しさに繋がっていることがわかった。特に、学生のレベルに合い、かつ学習者の興味を引き出すタスクを準備するのが着任時の講師にとって難しい。しかし、1年目は最初は前任者のやりかたを踏襲していても2年目に入ると自分なりの授業を構築する人が増え、自立した考える教師へと成長する。また、非漢字圏であるフランスの学習者の漢字への心理的・認知的壁に気づき、新たなアプローチに取り組んで成功したという例も報告された。一方、専任教師もタスク内容や留意点、試験問題などについて講師に相談を受けアドバイスを与える機会が多いと、その話し合いのプロセスにおいて様々な問題点について意識化することができ、学びと刺激を受けている。では学生たちはどうであろうか。アンケート結

果によると講師の先生たちが日本語を多く使って話すことにメリットを感じる学生もいる一方、フランス語を話さないためコミュニケーションが十分にできないというような否定的なコメントをする学生も見られた。後者のタイプの学生も新たな学習スタイルに気づき、新たな（高校とは違ったタイプの）教師と学生のコミュニケーションを実践することにより、言語運用能力面でも異文化の面でも得るものが多いだろう。このように三者が各自のノウハウを活用し積極的にコミュニケーションを行うことにより、互いに学び与え合い、成長すると考えられる。